14日本文化における時間と空間（加藤周一）

Ⅰ　「今」は瞬間ではない。①時間直線上の一点ではなく、状況に応じて、ある場合には短く、ある場合に長い持続が、「今」として意識される。「がらへば又のごろやしのばれんうしとみしよぞ今は恋しき」の「今」は「［　Ｘ　］」と等価であり、おそらく数年を意味するだろう。「②＊松（待つ） としきかば今かへりこむ」の「今」（今すぐ）は、それよりも短い。  
 ③どれほどの長さの持続を「今」とするか、一般的な定義を考えることはできない。「今」はゴムのひものように伸縮する。（中略）「今」が収縮すれば、「今かヘりこむ」となり、「いまはかうとおもはれければ」（『平家物語』「」）となり、には俳句の一瞬となる。

Ⅱ　始めなく終わりない歴史的時間は、方向性をもつ直線である。この直線上の事件には先後関係があるが、直線全体の分節化はできない。④円周上を循環する自然的時間の場合には、事件の先後関係ばかりでなく、分節をあきらかにすることができる。冬来たりなば春遠からじ。日本列島の本島西部と九州―すなわち古代文化の中心であった地域では、四季の区別が明瞭で、規則的であり、その自然の循環する変化が、農耕社会の日常的な時間意識を決定したであろうことは、想像に難くない。（　Ａ　）日本文化の時間の表象の第二の型は、始めなく終わりなく循環する時間である。循環するのは、ヘレニズムの場合のように天体の位置ではなく、季節であり、時間の円周は四季に分節化される。農耕は四季の循環に応じた種まきや草とりや収穫の労働なしには成り立たない。日本の農業の自然的条件は、四季の交替が明瞭でなく一年を通じて高温高湿の東南アジアの条件とは異なるのである。（　Ｂ　）

Ⅲ　九世紀以後平安朝の宮廷文化は、⑤季節に敏感な、というよりも敏感であらざるをえなかった生産者＝農民の感受性を、全く非生産的な美的領域に移して、洗練した。『枕草子』は有名な「春はあけぼの」、「夏はよる」、「秋は夕暮」、「冬はつとめて」で始まる。同様に『古今和歌集』の最初の六巻は四季の歌である。（　Ｃ　）他に恋歌五巻があり、春夏秋冬と恋をあわせて全二〇巻の半分を超える。詩の主題が恋に集中するのは、なにも平安朝の日本に限ったことではない。（　Ｄ　）その傾向はすでに『万葉集』にもあらわれていて、それが『古今和歌集』において徹底したのである。しかも四季の変化に対する関心は、平安朝以後さらに強まり、俳諧師たちにとってはほとんど強迫観念となって、周知のように、制度化された「季語」を生むに至った。「季語」はになく、おそらく欧州諸国にもない。

語注

＊ながらへば…の新古今和歌集所収の歌。

＊松（待つ）としきかば今かへりこむ…「立ちわかれいなばの山のにおふる松としきかば今かへりこむ」（『古今和歌集』）。

問１　次の一文は（　）Ａ～Ｄのいずれに入るものか。記号で答えよ。

しかし四季に集中するのは、全く例外的であり、中国においてさえもこれほどではなかった。

（　　　）

問２　―線部①について、「時間直線」と同じような意味で用いられている部分を、Ⅱの文中から一〇字以上、一五字以内で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　 　　　　　〕

問３　［　］Ｘに入る適切な語句を、「ながらへば…」の歌中から四字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　〕

問４　―線部②のように、一語に二つの意味を響かせる技法を何というか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　　　イ　詞　　ウ　縁語　　エ　暗喩　　オ　明喩

問５　―線部③とあるが、何によって定義されるのか。文中から二字で抜き出して答えよ。

〔　　　 　　〕

問６　―線部④とあるが、それはなぜか。答えとなる部分を文中から一三字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　――線部⑤について、なぜ「敏感であらざるをえなかった」のか。その理由がわかる一文を抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　Ｄ

問２　始めなく終わりない歴史的時間（14字）

問３　此のごろ

問４　イ

問５　状況

問６　四季の区別が明瞭で、規則的

問７　農耕は四季

ポイント

問１　「四季に集中する」とよく似た「抒情詩の主題が恋に集中する」が、本文の最後から六行目にある。